

心豊かな暮らしの要件

上 廣 榮 治

日米中韓の四か国の高校生の意識調査で、「偉くなりたい」と希望する生徒の割合が、日本は他国に比べて極端に少ないという結果が出たと、新聞やテレビが報じて話題になっています。

偉くなりたいかという質問に対して、「強くそう思う」と答えたのは、米国の生徒の約二二%、中国の三四%、韓国二三%に対して、日本はわずかに八%。「まあそう思う」を含めると、米中韓ではおよそ六〇%から八〇%に上り、大多数の生徒ができれば偉くなりたいと思っているのですが、日本は四四%に過ぎず、半数以上の生徒が意識的に「あまり偉くなりたくない」と思っているらしいのです。

なぜ、偉くなりたいのか、あるいは、なりたくないのでしょうか。偉くなるとどうなるのかという質問では、他国の生徒の多くが「自分の能力をより発揮できる」「周りに尊敬される」などと、偉くなることをプラスに捉えているのに対して、日本の生徒は、偉くなれば「責任が重くなる」「自分の時間がなくなる」と、マイナスのイメージをもっています。

また、各国の生徒が、何をもって「偉い」と思っているのかはわかりませんが、他国の生徒の希望する職業が、医師、プロのスポーツ選手や歌手・俳優、経営者、管理職、公務員、教師などであるところを見ると、

高収入で、指導的立場にあってたり人気者であることが「偉い」と意識されているようです。

しかし日本の生徒たちは、営業・販売・サービス職の希望が多く、花形的な職業や分に過ぎた地位を望む例は、他国に比べると多くはありません。

では、日本の高校生たちはどんな生活をしたいのかというと、「適当な収入があれば、のんびりと暮らしていきたい」と思っているのだそうです。ここでも他国の生徒が何かに「挑戦したい」「自分の力を発揮したい」と思っているのと対照的です。

偉くなどなりたくはなく、平凡な仕事について、のんびり暮らしたい。こうした傾向を、ほとんどの新聞やテレビは「夢がない」「若者の意欲の低下が心配だ」という論調で報じていました。しかし、私は必ずしもそうとはかりは思いません。むしろ、彼らの堅実なつましさをプラスに評価したいと思うのです。それは、日本人の多くが願う「平凡な仕合わせ」と同種のものだと思っからです。

ただしここで、「偉くなりたくない」「のんびり暮らしたい」と希望した高校生や、「平凡な仕合わせ」を望んでいる多くの人に、ぜひとも申し上げておきたいことがあります。

「のんびりした暮らし」や「平凡な仕合わせ」を築き上げるのは、実は容易なことではないということです。それは、出世欲に燃えて、家族や人の迷惑も顧みず、ただひたすら仕事に没頭し、あるいは技能の錬磨に精進して、いわゆる「偉い人」になるよりも、ある意味ではずっと困難な道であるのです。

もしも、努力しないでのんびり暮らしたい、努力したくないから平凡でいい、と思っているとしたら、了見違いも甚だしいというものです。努力することなしには、のんびりした暮らしも、仕合わせな生活も実現できるはずはないのです。

では、「のんびりした暮らし」とか「平凡な仕合わせ」とは、どのようなものなのでしょう。それは、心

を乱されることのない、満ち足りた生活です。自ら欲するままに日々を営み、常に「上機嫌」を損なうことのない平穩な暮らしです。

そうした心が満ち足りた暮らしのためには、家族が不和であっては論外です。自分を取り巻く社会的な環境に倫理的な混乱があってもなりません。つまり、積極的に家庭愛和を実現し、社会に対する責任を果たして、倫理的な環境をつくる努力が不可欠です。そうした実践努力の大切さは、皆さんはつとに身に沁みてご存じのところでしょう。

心が満ち足りた暮らしには、実はもう一つ大事な要件があるのです。自分がこの世に生きている意味を果たしつつあると実感できることです。無意味に安閑あんかんと生きているだけというのでは、喜びも薄く、のちに悔いを残します。

かつて私はこの『倫風』誌上で、「現代人が見失ったもの」(二〇〇三年十二月号)と題して、幸田露伴の『文明の庫くら』を引用したことがあります。ただいたずらに戦史に名を留め、巨大な墳墓はかを残すだけの偉人になるか、人々に恩恵を施し続けるものを生み出す名もなき人になるか、そのどちらが尊い人生かという問いかけでした。

答えはもちろん後者です。「我も人ももの仕合わせ」を目指す私たちは、人を支配し、不幸を強いる酷薄な立場を拒否します。己の良心を欺あざむき、人の希望を砕くあらゆることを拒否してこそ、心の平安を得られるからです。

環境の破壊に与くみすることもできません。世の中の人々に、できれば後世の人々にも喜んでもらえるような何事かを行なうことで、この世に生まれてきた意味を叶えることができます。

自分は今、人が喜んでくれる何事かに邁進している。例えば、誰もが喜ぶ安全でおいしい野菜を生産して

いる。生活に役立つものを作っている。人々に勇気を与える作品を創造している。環境汚染を防ぐための努力を積み重ねている。地域の愛和に貢献している。子どもたちに生きることの意義を身をもって教えている……。そう確信できてはじめて、大自然の摂理とともにある喜びを実感することができるのです。

私たちは、人の仕合わせに奉仕して「我も人ももの仕合わせ」を実現するために生まれてきたのです。それがこの世に生まれてきた目的だといつてもよいでしょう。その目的を実現しつつあるのだ、そう自覚できてはじめて、心になんの翳りかげもない人生、すなわち「のんびりとした暮らし」や「平凡な仕合わせ」を自分のものにできるのです。

もちろん、前掲の日本の高校生たちがこれらのことを自覚したうえで、「偉くなどなりたくない」「のんびり暮らしたい」と言っているわけではないでしょう。しかし私は、それを「困ったことだ」とは思わないのです。人生でいちばん大切なことは、心が満ち足りた暮らしであると、彼らはおぼろげながらも気づいているのでしょうか。そのことを私は喜びたいと思うのです。

では、そうした彼らの希望を実現するには、何をしなければならぬのか。何から始めれば、確実に心豊かな仕合わせを実現できるのか。その点について彼らと語り合うことができそうだとするところに、私は大きな可能性を感じています。

